日韓発掘交流に参加して

2018年９月３日から10月５日まで、日韓発掘交流事業により、国立慶州文化財研究所に滞在し、月城垓子地区および皇龍寺南門周辺の発掘調査に参加しました。日韓発掘事業は2005年より始まり、昨年で14年目となります。

月城垓子地区は、1984年以降継続的に調査が行われており、近年は復元整備を見据えた調査が進められています。私が参加した段階では調査はほぼ終盤になっており、土層観察用に残していた畦の掘削が進められていました。皇龍寺南門周辺の調査は、1976年から1979年にかけて調査され既に整備された部分を再調査するものでした。整備で高さの位置を変えられた礎石の下には当初の根石が良好な状況で残っていました。断割調査を担当し、大ぶりの石で周囲を固め、比較的小さめの石を中央に配置している根石の状況が確認できました。南門と中門との間には両脇に廊状の建物跡が検出されており、非常に興味をもちましたが、滞在期間中には調査は完了せず、今後の調査成果に期待するばかりでした。私の片言の韓国語にもかかわらず、研究員の先生、作業員の方々には、さまざまに考えを汲んでいただき調査を進めることできました。

調査の合間や雨天の際には、歴史的建造物の修理工事や公開活用事例、最新の遺跡整備事例など韓国における先端の文化財保存活用事例を学ぶことができました。韓国においても発掘成果から建造物を復元するような研究が、今後より一層進められていくようですので、今回の交流をきっかけに復元研究においても、さらに研究交流を活発にしていければと思います。　　（都城発掘調査部　前川 歩）

発掘調査風景（左が筆者）